

種壺クラブ ～番外編～



設定

元いじめられっ子 S × 元いじめっ子 M

本編では主人公の翼がバーベルクラブ(種壺クラブ)に入部し、監督に与えられた媚薬の効果と依存性があるプロテインでおとされてしまい、『種壺』の一員となってしまいました。

番外編ではその翼を『種壺』として使ったり、高校の野球部同級生土橋や吉田の前で晒したりしていた境雄一がおとされていく展開です。

※番外編は「依存」「復讐」がテーマになっています。

電気あんま、亀頭責め、潮吹き、連続強制射精、チンカスプレイ、ケツ堀りブランコ、フィスト等

15500 字程度の作品で、画像のみ AI で作成しています。

登場人物

池谷 翼(いけたに つばき) 20 歳 2 年

明るく無邪気、人に好かれやすい。

神谷 恵一(かみや けいいち) 22 歳 4 年

翼の高校の先輩でバーベルクラブ新部長。

須藤 明(すどう あきら) 41 歳 監督

体育会気質。ほしいものを手に入れるためには手段を選ばない。

境 雄一(さかい ゆういち) 20 歳 2 年

翼と同じ高校で同じく野球部出身。大学も一緒だが狡猾な性格のため、翼に距離を置かれていた。翼が『種壺』になったことを知り辱めていた。

吉田 斗真(よしだ とうま) 19 歳 2 年

翼と境の野球部同級生。自分の意見をはっきり言えず。境にいじられたり、パシられたりしていた。

入部

境雄一は大学2年生となっても変わらない日々を過ごしていた。適当に授業を受けて、飲み会に行って、性欲やストレスがたまれば翼や神谷先輩で発散をする。金には困っていないからバイトをする必要もない。毎日が充実していてイージーモードだった。

月1回の種壺クラブの帰り道、雄一はたまたま種壺クラブ主催者の監督と出くわした。監督は機嫌が良さそうで、雄一に話しかけてきた。

「いつもありがとうな。いい体しているな。筋トレしているんだってな」

「ええ、趣味程度ですがジムに通ってます。こちらこそ、俺も楽しんでますよ。神谷先輩と翼の無様な姿見るのいつも楽しみにしています」

「うちに入ってほしいがな」

「勘弁してくださいよ」

二人は顔を見合わせて爆笑する。そして、監督は笑いながら紙袋を差し出した。

「いつも来てくれている礼だよ。試作品のプロテインだ。かなり効果があるから騙されたと思って使ってみてくれ」

(あれだけいる客のうちの一人にすぎない自分にわざわざプレゼント……?)

少し疑問に感じたが、断る理由もなく受け取った。

翌朝、トレーニング後にそのプロテインを飲むと体の奥で、説明できない熱が灯った。筋肉というよりも、もっと内側から脈打つような昂まり。気づけば自分の陰茎は勃起していて、自然とオナニーをはじめていた。

そして、その夜、無性にそのプロテインを求めている自分に気づいた。

「……おかしいな」

しかし、体は正直だった。不安を抑えきれず、雄一は監督を訪ねた。監督は静かに笑い、部屋へ通す。

「追加が欲しいのか？」

「……はい。なんか無性に飲みたくなるんです……」

「あれはとても効果があるからな。筋肉が欲しているんだろう。あげるのはいが、条件がある。簡単なことだ」

「か……金なら払います、だから……」

「金はあとでどうにでもなる……今はそれよりも俺の指示に従ってもらいたい」

監督は冷静に告げる。

最初の指示は全裸になって鍛えた筋肉をさらすことだった。男同士だし、監督も筋肉に興味あるんだと思って従った。監督は雄一の体を見ながら終始ニヤついていた……。ただ、それだけであのプロテインをもらうことができ、雄一は喜んでいた。しかし、監督は一日分しかくれなかったため、しかたなく毎日の

ように監督のもとへと通うこととなった。

そして、監督の要求は日に日に大きくなり、気づけば監督の前でオナニーを晒し、監督のペニスをフェラして、そのペニスをアナルに挿入されていた。

ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ♡

「ほら、俺のちんぽがお前の中にはいっているぞ、気持ちいいだろう？」

「ググッ、がっ、……ツ……はい……きもちいい……です……」

「こうやって毎日ほぐしていこうな、雄一。頑張ったらあのプロテイン無料でやるからな……」

あのプロテインは普通じゃない。毎日飲むたびに、監督の声が頭の中でよく響くようになる。監督の命令が、妙に心地よくなる。それでも飲まないわけにはいかない。

監督の“支配”は肉体ではなく、精神の奥底に触れられる感覚だった。監督の声が、思考の中心に入り込んでいく……。

先輩や翼が狂ったように従順になっていった理由。笑いながら監督の影に縋りつくようになった理由。自分が馬鹿にしていた“墮落”の形。すべてが理解できてしまった。

最初は嫌だった。耐えられなかった。必死で拒否しようとしていた。でも、今は少し違う。監督の言葉を聞くと、雄一の体は静かに震える。命令されると、心が救われる。

——自分はもう、プロテインではなく監督そのものに依存している。